様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２７７９

研究課題名（和文）対称的素句構造の音声化・線形順序化における形式素性・形態格の役割について

研究課題名（英文）Functions of Formal Features and Morphological Case in Spell-Out and Linearization of Symmetric Bare Phrase Structure

研究代表者
成田　広樹（NARITA, Hiroki）

東海大学・文学部・講師

研究者番号：６０６０９７６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：生成文法理論において支配的に仮定されてきた投射の概念を全面的に破棄し、集合形成演算としての併合に基づく厳密な対称的素句構造理論を構築した。特に、併合操作の対称性、意味・音声インターフェイス表示への写像(移送)に供される構造の形式素性の分布についての均衡化、および人間言語の移動操作を律する基準凍結の効果を統一的に導出する仮説としての対称性原理を提案した。さらに、併合生成可能性の制約の脳科学的実証、省略削除操作における形態論的制約の解明、フェイズ毎の周期的線形化メカニズムの究明、生成文法理論の哲学的意義付けについて成果を上げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
人間言語の根底に潜む対称構造の内実を究明した。世界に数万と存在する自然言語は語順や語彙の発音等々、その音声形態的側面について多大な多様性・非対称性を示すが、本研究課題の研究成果によれば、このような表層上の言語間差異の背後には、普遍的・統一的な対称構造が潜んでいる。自然界が作り出す有機物・無機物のデザインには対称構造が多く見られることなどから考えると、言語のような心的対象の背後にもやはり対称構造が潜んでいるという知見は、本研究課題が提案する対称性原理が、世界の物理的側面と心的側面の両方に通底する統合的原理である可能性を強く示唆するものであり、言語研究の学際的意義を一層際立たせるものである。

研究成果の概要（英文）：We constructed a strictly symmetric theory of bare phrase structure, adhering to Merge as an unordered set-formation operation and eradicating the still dominant hypothesis of universal projection. We formulated the Symmetry Principle as a unifying hypothesis that derives the symmetry of Merge, various instances of feature-equilibrium typically appearing at Transfer domains, and the effect of criterial freezing. Further, we published our work on a brain-imaging study on the Merge-generability of linguistic dependencies, morphological-structural constraints on ellipsis, phase-by-phase cyclic linearization, and philosophical foundations of generative grammar.

研究分野：理論言語学（統語論）

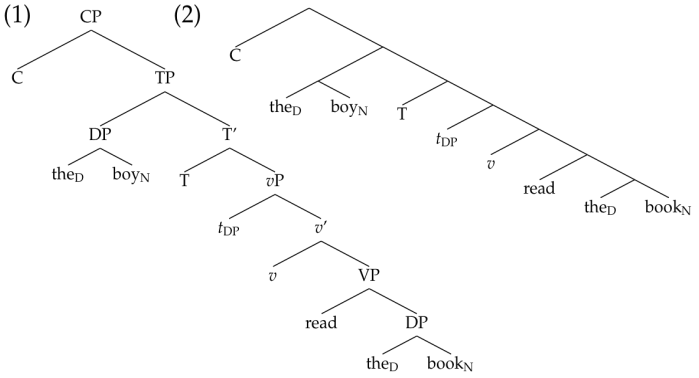
キーワード：統語論・統辞法/syntax　生成文法/generative grammar　併合/Merge　対称性/symmetry　省略/ellipsis　投射/projection　形式素性/formal features　移動/movement

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

人間言語は、the, book などの単語や時制辞 T などの接辞（語彙項目）をそれぞれ語彙辞書（レキシコン）から取り出し、それらを再帰的に組み合わせていくことで、右図(1)に見られるような階層的句構造表示を生成する計算システムと考えることができる。20 世紀までの言語理論においては、(1)のような句構造表示は、当該の文や句に含まれる各構成素に関して、以下の３つの情報を定義するものと見られていた。



(3)a. 階層構造:
　　構成素間の支配・包含関係
　b. ラベル:
　　CP, VP などの各構成素の範疇等の諸特性を決定する非端末記号
　c. 線形順序:
　　各構成素間の時間的先行関係

特にＸバー理論（X'-theory; Chomsky 1981 等）の登場以来、各句構造のラベルはそれが含む単一の語彙項目(主辞(head)と呼ばれる)の「投射」(projection) によって一律に決定されるとする考えが支配的であった。

(4)全投射（universal projection）の仮定：全ての句構造はそれが含む単一の主辞語彙項目の投射として分析される．例えば動詞句は動詞 V の投射 VP（V"）として分析され，名詞句は名詞 N の（または冠詞 D の）投射 NP（N", または DP/D"）として分析される．

しかし、Chomsky(1995)以来盛んに研究が進められている併合(Merge)の理論(「素句構造理論」(bare phrase structure theory)ともよばれる）は、これら(3a-c)全ての情報が狭義の句構造表示に含まれているという考えを退ける。併合は(5)に示すような単純な集合形成の演算であり，n 個（典型的には２つ）の語彙項目や句などの統辞体 Σ_1, …, Σ_nを入力とし，それらの統辞体からなる集合$\{\Sigma_1, \cdots, \Sigma_n\}$を出力として生成する(定義上、集合は要素の線形順序を含まない)。

(5) 併合$(\Sigma_1, \cdots, \Sigma_n) = \{\Sigma_1, \cdots, \Sigma_n\}$

併合理論によれば，人間言語の全ての句構造は併合の再帰的適用によって形成される集合論的構造体に過ぎない。そこでの句構造表示は、むしろ(2)に図示されるような，線形順序及び投射関係を欠いたものとなる。併合理論は、構成素のいずれか一方のみが投射をするとか、一方が他方に時間的に先行するなどの、非対称的関係の想定を極限まで排除しており、それゆえそこでの句構造表示は「対称的」(symmetric)とみなすことができる。

一方で、狭義の言語機能が生成する素句構造がこのような対称性を持つとしても、人間の認知に表出する場面においては、意味-音声インターフェイスに写像された句構造表示が引き続き非対称性を示すことは明らかである。まず、言語は必ず時間的先行順序に沿って線形に音声化されることは事実であるため、言語の音声化部門が、各素句構造表示に対して線形順序を与え、形態素性を含む種々の音声的な弁別的特性を付与する何らかの非対称化のメカニズムを備えていることは疑い得ない。また、意味インターフェイス表示においても、例えば動詞句 VP が主辞 V によって述語性や時制などの動詞的特性を獲得し、名詞句 NP が主辞 N に基づいて指示性などの名詞的特性を獲得するというように、専ら主辞によって当該の句構造の中核的特性が決定されるという、従来「内心性」と呼ばれてきた解釈上の非対称性が存在する。Chomsky (2013)らによって指摘されたように、かつて全投射の仮定(4)の直接的帰結として捉えられてきた内心性は、投射の概念を破棄した素句構造理論の下でどのように特徴付けられるべきかは、大きな問題として残っている。

２．研究の目的

人間言語の素句構造がいかにして意味インターフェイスへの写像の過程で内心性に基づく解釈的非対称性を獲得するのか、そしていかにして音声インターフェイスへの写像で線形順序化を含めた非対称化が行われるのかを究明することを目標とし、研究を推進した。特に、従来のラベル・投射などの概念を厳密に破棄した上で、各句構造表示の（非）内心性および（非）対称性の対比に着目しながら、特に非内心的・対称的構造の線形化における素性一致や形態素性の役割についての統一的分析を試みた。また、各言語における形態素性（特に一致素性と格素性）の分布の言語間差異とその音声化・線形化における役割を重点的に検証した。さらに、句構造の音声化における他の操作、特に省略操作との相互作用に着目しながら、音声化および素性一致のメカニズムを究明した。

３．研究の方法

Ｘバー理論（X'-theory）の登場以来（Chomsky 1981 等)、句構造の内心性は主辞の投射の概念によって決定されるという仮定が一般的であった。

(6)投射＝内心性の仮定：句構造の内心性はその句がどの語彙項目(主辞)の投射であるかによって決定される。例えば名詞句が内心的なのは、それが名詞 N の投射(NP)であることによる。

(6)の仮定は、全投射の仮定(4)と組み合わされることで、以下の(7)を帰結として導出する。

(7)全内心性(universal endocentricity)・全ラベル付け(universal labeling)：人間言語における全ての句構造は内心的であり、単一の主辞あるいは語彙素性によってラベル付けされる。

X バー理論以降の生成文法理論において、(4),(6),(7)は実質上の不文律として広く仮定されてきたといえる。投射の概念を破棄した対称的素句構造理論の下では、これらの仮定は明らかに維持し得ないが、それにもかかわらず、現在行われている理論言語学研究は大半が未だ実質的に伝統的なラベル付き句構造に基づく研究試案にとどまっている。それゆえ、投射の概念を厳密に破棄し、併合理論のもとで、各素句構造をインターフェイス上で非対称化するメカニズムを解明することが必要である。特に本研究課題では、Chomsky (2013), Narita (2014)等の提案に依拠し、主辞決定メカニズムは各句に適用される最小探査(Minimal Search)に還元できるという可能性を追究した。このメカニズムは何らかの語彙項目 H を直接包含する句{H, XP}の主辞 H を決定することができるが、一方でこの形式を逸脱する{XP, YP}(XP, YP は共に句)等を非内心的構造として定義するという点で、従来の全内心性の仮定(7)から離れることになる。

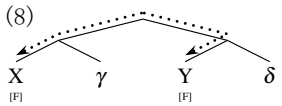
さらに、素句構造から音声インターフェイス表示への写像において起こる線形化（非対称的な時間的先行順序の付与メカニズム）の解明を、やはり全投射の仮定(4)を厳密に破棄した上で試みた。過去の線形化の理論はほとんど常に(4)に基づく非対称的句構造理論において定式化されてきた。例えば Chomsky (1981)の主辞パラメターの理論は、投射に基づいて定義される指定部(X’’の娘、X’の姉妹)、補部(X’の娘、主辞の姉妹)などの構造的概念を、各言語のパラメター値の設定に従って指定部-主辞-補部あるいは指定部-補部-主辞の順に線形化する。Kayne (1994)等の反対称性(antisymmetry)の原理は指定部-主辞-補部を普遍的語順とし、一方 Fukui & Takano (1998)の理論では逆に指定部-補部-主辞を普遍的語順とすることが提案された。しかし、これらの線形化理論も投射に基づく指定部・補部などの構造概念をもとに定式化されており、併合理論のもとで維持できるものではない。線形化の先行研究が持つこれらの問題を指摘した Narita (2014)によって提案された代案は、投射の概念に言及せずに定式化された殆ど唯一の線形化理論であると言えるが、そこでは付加詞句や等位接続構造、および(2)の{{the, boy}, {T, …}}などに見られるような{XP, YP}構造等、総じて{H, XP}(H は主辞となる語彙項目)という典型的内心構造を逸脱した非内心的構造(exocentric structures)に対する取り扱いが十分ではなく、未解決の課題も多かった。

本研究課題では、投射の概念に代わるインターフェイス非対称化の基盤として、音声・意味インターフェイスへの周期的移送(cyclic Transfer)に注目する。近年、自然言語における統辞計算が特に「フェイズ」(phase)と呼ばれるサイクルごとに局所化されて行われるという仮説が Chomsky(2008 他)等によって提唱され、現在様々な側面から検証が行われている。本研究課題では、音声化における周期的移送のタイミングのずれが非内心的{XP, YP}構造の非対称化・線形化に中核的役割を果たしているという仮説を提出した。また、意味インターフェイス表示への写像においても、最小探査の適用が移送の周期性に基づいて駆動されているという仮説を追究した。

４．研究成果

①<u>原探索・原併合に基づく言語の基本演算の分解分析</u>：言語の併合、移送などの基本演算についての福井直樹、辻子美保子(神奈川大学)、加藤孝臣(上智大学)、葛西宏信(北九州市立大学)との共同研究を、日本英文学会第 88 回大会にて発表した。また、Fukui, ed. (2017)に共同執筆者として加わり、4 編の論文を出版した。特に同論集所収の“0-Search and 0-Merge”では、人間言語の原始演算としての「原探索」(0-Search)と「原併合」(0-Merge)の概念を提唱し、併合、移送を含む言語機能の全ての統辞演算をこの 2 つの原始演算の合成として捉え直す理論を提案した。この提案は、素句構造理論の根幹をなす併合操作の原子性について根本的な再考を迫るものであり、また、最小探査操作の理論的分析をさらに推し進めていくための基礎となるものである。

②<u>素性均衡（feature-equilibrium）に基づく素句構造の対称化の究明</u>：(8)



上掲の Fukui, ed. (2017)に収録・出版した“Merge and (A)symmetry”(福井直樹との共著)では、句構造の対称性をめぐる分析を展開し、素性均衡(feature-equilibrium)の概念を提唱した。右図(8)のように、非内心的{XP, YP}構造のうち、最小探査が適用された際に同一の形式素性 F が XP, YP それぞれにおいて最も卓越した語彙要素として等距離に配置されている構造を F 均衡（F-equilibrium）と呼ぶ。TP={主語, {T, 述語}}の φ 均衡や Wh 疑問文 CP={Wh 句, {C, TP}}の Q 均衡などが素性均衡の典型例となるが、このような対称的構造は非常に安定性が高く、種々の演算についてそれ以上の侵襲が不可能となることが知られている（Rizzi 2006 らのいう「基準凍結」(criterial freezing)の効果が観察されるのも典型的に F 均衡構造である)。本研究では、従来理論の全投射(4)や全内心性・全ラベル付け(7)の非対称性中心の考え方とは対照的に、狭義の統辞部門はむしろ種々の非対称構造を対称構造へと写像する方向に駆動されているという仮説を提案した。

③<u>言語計算の出力に課される対称性原理(Symmetry Principle)の究明</u>：句構造の対称性についての福井直樹(上智大学)との共同研究 *Symmetry-driven Syntax*(仮題、Routledge と出版契約成約済)の執筆を進めた。本研究では、Chomsky (2013)らのラベル付けアルゴリズムに関する研究を批判的に検討し、代案として、対称性に基づく句構造生成の統一的原理を模索している。また、特に(a)併合の対称性、(b)移送に供される構造が典型的に素性均衡（あるいは未処理の形式素性

を欠いた非内心構造）を示すという事実、および(c)人間言語の移動操作を律する基準凍結原理の効果、の３つを統合的に導出する原理として、以下の対称性原理を提案する。

(9) 対称性原理(Symmetry Principle)：生成手続 GP の出力構造は対称的である。

併合は言語の根本的生成手続であり、そこから出力される集合論的素句構造は線形順序などの非対称的関係を有さず、したがって(9)を満たす(a)。また、素句構造を意味・音声インターフェイスへと写像する移送も出力構造を伴う GP であり、したがって移送構造は素性均衡などの対照性を示すことが(9)から要求される(b)。また、基準凍結原理を違反する移動は②の移送構造の対称性を破る破対称(symmetry-breaking)な操作であるという点で抑制される(c)。このように、かつて別々に扱われていた(a)-(c)の現象を統一的に説明する対称性原理を定式化した。対称性原理は、その出自が狭義の言語を超えた自然法則との連続性を持っている可能性もあり、今後の研究がまたれるものである。

④併合生成可能性（Merge-generability）の制約の脳科学的実証：酒井邦嘉研究室(東京大学)で行った脳科学実験の共同研究が査読を経て受理され、*Frontiers in Psychology* に出版された。本研究は、併合操作(5)の作り出す素句構造が、線形順序などの非対称的特性を欠いた対称的構造体であることに着目する。ここから引き出される予測は、人間言語において生成可能な(したがって狭義の言語に関わる脳部位の活動によって処理される)依存関係は、線形順序などの非対称的関係に基づくものではありえず、姉妹関係などの対称的関係に基づく併合生成可能(Merge-generable)なものに限られるということである。本研究の成果は、脳科学的観点からこの予測に独自の証拠を提示するとともに、計算言語学などで長期にわたり中心的課題とされてきた弱生成(線形記号列/文字列の生成)が、人間言語にとっては周縁的な副次現象に過ぎないということを強く示唆するものである。

⑤省略削除操作における形態論的制約の究明：諸言語の省略現象について、木村博子(千葉工業大学；研究分担者)との共同研究を進め、特に日本語の短縮応答構文の分析を中心とした研究成果を SICOGG 18、GLOW in Asia 2017 において発表した。さらに、日本英語学会第 36 回大会シンポジウム「言語理論における形態論の「分散」をめぐる諸問題」に登壇し、複合語を伴う Wh 疑問文に対する短縮応答が句 Wh 疑問文に対するそれとは異なる振る舞いを示すことを示し、複合語形成という形態論の主要なテーマについて、分散形態論(Distributed Morphology)的枠組みのもと、省略という新たな観点からアプローチすることに成功した。また、木村が省略構文についての書籍(Konietzko 2016)について書評を著し、省略研究の現在の状況と将来的課題について論じた。さらに、短縮応答における省略の認可条件の研究成果が査読を経て *Linguistic Inquiry* 誌に受理された（近刊予定)。本研究では、省略の認可条件に関して、従来盛んに主張されてきた意味的同一性では十分ではなく、構造的相同性(structural isomorphism)を見る統辞的同一性が決定的に重要であるとする強い証拠を、特に日本語の複合語 wh 疑問文に対する短縮応答の振る舞いについての詳細な観察・分析から提示した。また、本共同研究をさらにイディオムの解釈の研究に発展させたものを日本英語学会年次大会にて発表した。

⑥フェイズ毎の周期的線形化メカニズムの究明：2018 年度に関西言語学会第 42 回大会にて招待講演をおこない、フェイズ毎の周期的移送に依拠した句構造線形化の新しい理論を展開し、特に日本語の形態格脱落の現象から証拠となるデータを導き出すことに成功した。同研究に基づき、2019 年度に論考を作成し、関西言語学会会報に出版した。本論考では音声線条化のメカニズムにおける形態格の役割に焦点を当てて論じるとともに、日本語の格脱落(Case marker drop)の現象についての統一的分析案を展開した。

⑦生成文法理論の哲学的意義付け：Chomsky (2012)の翻訳を完成させ刊行することができた。また、生成文法の科学哲学的基礎についての研究成果を、慶應言語学コロキアムにて発表し、ICUWPL から出版することができた。また、Al-Mutairi(2014)について書評論文を出版し、極小主義プログラムが推し進める最適性・計算効率性の概念を批判的に検討した。そして、名古屋哲学フォーラム、静岡大学理論言語学セミナーに参加し、語彙形成・哲学・ 算術・料理などの人間独自の行動様式の様々な特質やその言語との連関について論じた。

引用文献：

Al-Mutairi, Fahad Rashed. 2014. *The minimalist program: The nature and plausibility of Chomsky's biolinguistics*. CUP.

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding*. Foris.

Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. MIT Press.

Chomsky, Noam. 2012. *The Science of Language*. CUP.

Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130:33-49.

Fukui, Naoki, ed. 2017. *Merge in the mind-brain*. Routledge.

Fukui, Naoki, and Yuji Takano. 1998. Symmetry in syntax: Merge and Demerge. *Journal of East Asian Linguistics* 7:27-86.

Kayne, Richard S. 1994. *The antisymmetry of syntax*. MIT Press.

Konietzko, Andreas. 2016. *Bare Argument Ellipsis and Focus*. John Benjamins.

Narita, Hiroki. 2014. *Endocentric structuring of projection-free syntax*. John Benjamins.

Rizzi, Luigi. 2006. On the form of chains: Criterial positions and ECP effects. In *Wh-movement: Moving on*, ed. Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, 97-133. MIT Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　12件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Kimura, Hiroko, and Hiroki Narita	４．巻 未定
２．論文標題 Compound Wh-questions and Fragment Answers in Japanese: Implications for the Nature of Ellipsis	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Linguistic Inquiry	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1162/ling_a_00362	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Tanaka, Kyohei, Isso Nakamura, Shinri Ohta, Naoki Fukui, Mihoko Zushi, Hiroki Narita, and Kuniyoshi L. Sakai	４．巻 10
２．論文標題 Merge-Generability as the Key Concept of Human Language: Evidence From Neuroscience	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Frontiers in Psychology	６．最初と最後の頁 Article 2673
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2019.02673	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Narita, Hiroki	４．巻 7
２．論文標題 Neo-Cartesianism in Generative Grammar	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ICU Working Papers in Linguistics (ICUWPL) Vol. 7: Festschrift for Professor Tomoyuki Yoshida on his 60th Birthday	６．最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 漆原朗子・木村博子・成田広樹・渡辺明・多田浩章	４．巻 37
２．論文標題 統語-音韻インターフェイスに必要な情報の表示をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 JELS 37	６．最初と最後の頁 160-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hiroko Kimura	4．巻 88
2．論文標題 A Non-Movement Analysis of Why-Stripping	5．発行年 2018年
3．雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics (Proceedings of Workshop on Altaic Formal Linguistics 13)	6．最初と最後の頁 363-370
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiroki Narita	4．巻 38
2．論文標題 Cyclic Spell-Out as a Locus of Exocentric Linearization	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the Forty-Second Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society (KLS 38)	6．最初と最後の頁 193-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiroki Narita	4．巻 35
2．論文標題 Review of The Minimalist Program: The Nature and Plausibility of Chomsky's Biolinguistics by Fahad Rashed Al-Mutairi, Cambridge University Press, Cambridge, 2014.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 English Linguistics	6．最初と最後の頁 193-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiroko Kimura	4．巻 60
2．論文標題 Review: Konietzko’s (2016) Bare Argument Ellipsis and Focus	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Studies in English Literature	6．最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kimura, HIroko, and Hiroki Narita	4．巻 MITWPL 84
2．論文標題 In-Situ Properties of Fragment Answers: Evidence from Japanese	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Proceedings of GLOW in Asia XI, Volume I, ed. by Michael Yoshitaka Erlewine	6．最初と最後の頁 141-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Fukui, Naoki, and Hiroki Narita	4．巻 -
2．論文標題 Merge and (A)symmetry	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Naoki Fukui, ed., Merge in the Mind-Brain. London: Routledge	6．最初と最後の頁 35-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kato, Takaomi, Masakazu Kuno, Hiroki Narita, Mihoko Zushi, and Naoki Fukui	4．巻 -
2．論文標題 Generalized Search and Cyclic Derivation by Phase: A Preliminary Study	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Naoki Fukui, ed., Merge in the Mind-Brain. London: Routledge	6．最初と最後の頁 75-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Fukui, Naoki, and Hiroki Narita	4．巻 -
2．論文標題 Merge, Labeling, and Projection	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Naoki Fukui, ed., Merge in the Mind-Brain. London: Routledge	6．最初と最後の頁 94-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Narita, Hiroki, Hironobu Kasai, Takaomi Kato, Mihoko Zushi, and Naoki Fukui	４．巻 -
２．論文標題 0-Search and 0-Merge	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Naoki Fukui, ed., Merge in the Mind-Brain. London: Routledge	６．最初と最後の頁 127-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kimura, Hiroko, and Hiroki Narita	４．巻 -
２．論文標題 Focus-inclusive Deletion in Fragment Answers: Evidence from Japanese	５．発行年 2016年
３．雑誌名 Proceedings of the 18th Seoul International Conference on Generative Grammar (SICOGG 18), ed. by Tae Sik Kim and Seungwan Ha	６．最初と最後の頁 225-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 木村博子・成田広樹
２．発表標題 削除が意味解釈に及ぼす影響について
３．学会等名 日本英語学会第37回大会シンポジウム「統語-音韻インターフェイスに必要な情報の表示をめぐって」．関西学院大学．2019年11月9日
４．発表年 2019年

１．発表者名 成田広樹・木村博子
２．発表標題 複合語を伴うWh疑問文と短縮応答について
３．学会等名 日本英語学会第36回大会シンポジウム「言語理論における形態論の「分散」をめぐる諸問題」．横浜国立大学．2018年11月25日．
４．発表年 2018年

１．発表者名 成田広樹
２．発表標題 Cyclic Spell-Out as a Locus of Exocentric Linearization
３．学会等名 関西言語学会第42回大会（京都大学）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 成田広樹
２．発表標題 ヒトがつくることば、ことばがつくるヒト
３．学会等名 名古屋哲学フォーラム 2017秋:言語・進化・生物:生成文法の哲学をつくる（南山大学）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 成田広樹
２．発表標題 ヒトがつくることば、ことばがつくるヒト
３．学会等名 静岡大学理論言語学セミナー（静岡大学）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 成田広樹
２．発表標題 ラベルはどこにあるのか
３．学会等名 慶應言語学コロキアム（慶應義塾大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kimura, Hiroko, and Hiroki Narita
２．発表標題 Non-Movement Properties and Structural Isomorphism of Fragment Answers in Japanese
３．学会等名 GLOW in Asia 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 成田広樹
２．発表標題 ヒトは自らの問いにどこまで答えることができるのか:『チョムスキー 言語の科学:ことば・心・人間本性』を巡って
３．学会等名 慶應言語学コロキアム（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Kimura, Hiroko, and Hiroki Narita
２．発表標題 Focus-Inclusive Deletion in Fragment Answers: Evidence from Japanese
３．学会等名 18th Seoul International Conference on Generative Grammar (SICOGG 18)（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 成田広樹・葛西宏信・加藤孝臣・辻子美保子・福井直樹
２．発表標題 原始演算とインターフェイス条件をめぐる考察
３．学会等名 日本英文学会第88回大会シンポジア第十一部門「統辞法の原始演算とインターフェイス」（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 加藤孝臣・葛西宏信・成田広樹・辻子美保子・福井直樹
２．発表標題 原探索と原併合
３．学会等名 日本英文学会第88回大会シンポジア第十一部門「統辞法の原始演算とインターフェイス」（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Narita, Hiroki, and Naoki Fukui	４．発行年 2021年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 未定
３．書名 Symmetry-driven Syntax: Merge, Minimality, and Equilibria（仮題）	

１．著者名 ノーム・チョムスキー(著)・成田広樹(訳)	４．発行年 2016年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 vi+324+20
３．書名 チョムスキー 言語の科学―ことば・心・人間本性（Chomsky, Noam, 2012. The Science of Language: An Interview with James McGilvray. Cambridge: Cambridge University Press. の翻訳）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

naturally mind/brain
http://hirokinarita.org/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	木村　博子 (KIMURA Hiroko) (40637633)	千葉工業大学・工学部・助教 (32503)	2017年度より研究分担者として参加。2017年度は前所属（目白大学外国語学部）。